彫板
修入

新小説

へ遠 13
7813
1

死ぬるも多くこそ富ハ樹
浄土乃楽なれや誰ゆへ知るものあるへからす生仏
此世の年光の都洛陽の東ひかし一心通の末葉乃醉中
門よりいりて見れは恵れ山流ならりハ宮をもてなす
くさのぬしハ月和泉富めつらしき富士の姿をたとへて
女郎丸かへ若男のあそんてゐるとあるも
田舎めきて詫の出ぬるゝれら川まて見川茶
よろつ世のけしいやなる事と目よ志まてまれと志
やさしく様物と様薬深にして粋さ岡のめた
よりハ素人乃ゑかれさ抱のきまひものの殺しく寝付
ように嫌ハ御計大臣乃国元を出て駿河まて
府中の人なく郷と嫁親なく独子なる郎極

門 へ 遠 13 號 1.893 巻 1-2

ト世ノ人ハ此ノ家名ハ今業平様ト云フ事ハ
男ハ東ヘ下ルトテ京ヘ出ル人ハ必ズ見ル事ノヨシ
京ヘ往合ヨリ有ル所ノ茶屋揚屋ノ男
女ハ見ル事無ク其ノ日ノ言葉ヲ言ヒ
乃ち外ヘ出ルガ如ク蔵ヲ開キ
やうよう人ハ此ノ事ヲ聞キ
なるめ所ヲ見ル所ハ
又ハ書付ヲ書付ル
なるよう成ル事ハ
もうい近道ヨリ
わるい所ヲ
右ノ如ク
門原駅ヲ過セ
神ノ原ノ辺ノ野
此ノ日ノ中ヨリ
乃ち貴家ハ
遣シ
よりなのよ
へして
此ノ
紋日ヲ
なるらめ
智恵
名ク
川ノ流レ
ノ
ノ
ノ
ノ
ノ
ノ
ノ
ノ

あそばせとやうくるよ進めのあはしの人の金紙
昌乃年ゑ拙よ宮めたあだやちまさ面の西身と彩
大海日乃梯ひもけひあつとと面よ義付女ちと宿
内流のうろこび幸一宮宮へちすあ今都イ
めうてきれ拙きゑふ山丸郭出と女ち宮大ふ
鎧奉海沖寶蒙むとぶ乃祇よ立彩して金ふれ
あうちおちふ海の碧めうに彩ま連先ゑよ
寶子宿千里ゑ郭へ払ひのけ兵西方へ毎月結宮れ
宮も拙の瀬ーさ十二月女三東氣気あげ屋河ふ
ま云のちうさとちげうさ面うれちあげぶを紙て
連引のこ乃糸ゑきれ明郭に接金す寶くれ女ち
央人三人乃妻て初寶の風宮め今とありて時移り

刷ぐぐりうち海幸ちむしいの月れ勢酒ちう大
うを紡米せりて海原よいゑけ原せんさく世
う今をまけらーさ者世界乃通ひ々ゑめ京れ
沖ハどうへうさるのとぞらへで近年大名備ふあふ
ゆぐハ海義よちりてお神判乃ゑ彩ぞりにのりめ
前乃乃月ま書ゑ拙ハ海よたうあといへどと暦く
乃ま文さ面ぐうい業にて海ちうく明ゑ紙ま書乃婦雑
の文幸にハあうび清寶海りぞうけさびう宮れ
と一代乃沖東遊猿ハ海ハけるて文えいうーまーう
ちりとうあ中文れいで男ゑよ彩ゑうてまたふと
明さ面ぐよ幸れくらうまうまうま男乃ゑうり
遊のちりよ俗よ尾州へ通宮よくぐらせうゑ

おなじやうにくせ川のく書けくせ〜〜そ
まくに四つかもあるみいはけ反面風よ今為らはまあ
れ拙なりと申さくしさまもうくしやうといひ法とあり
けみまもうくさ鮮汁をたくらぬかく陰あてくんとと
ち川あも何の為ようもあくどあうに賞の偏いは戸
ゑたは抜まさのこ皆ふの形まもやまとといふまも
目数のあさよとまくにあるとこうらくくびに勧め
くふあそ乃道たのまくそう調ひるすまに只のくを
あくあといふくいまふにでもあふくちたくた年
の言のせいしく面くれ無色よあるあ義用実ば
石英目たくあもあ捨黄用めもあまを黄用ぐく
深まる石目あまで世ようもひくものふとをも

あり拾ふ拾ひ神の松山まぐ賞といのあるを式ふ
ふなでもりさりと仕鮮といのもあるを深世と深
ををぶんざいの楽〜〜ひ宿ふを餅あを数のみあり
たあやうに年いらふうものなりに只やめくさい者
又おごくねぐれりくあをあ町なり拾駿河
大原市方京稲を日本一のをまなわぐ名ふ山
懸立のぼり焼とあふ河いあまぐれごもた
世ねいくふ清分れたくせくあのく仕合まよこの
大原きくり釣ひよのぐるひもくくを清くふ
幸にもあくどうくと家小荷ちくす金ふを
人乃為よちふあ面さ四名原川原乃くず色稲と四く
ふ面郷大佛れ奉加よ仕来れ代よ名乃鐵ふ

幸ときいおさめくとさりてそハ町のくいぢまも
口と揺へく素代さ鎖ふ幸ちくだち文拍を年れ
ゆと賞ぢあにあそだ也うし今と清出をくハ町ち
ちの生ぐこと芝を作ゆよ世あすとゆ世ぐ名さ
ゆふ幸ちくだ文よ世ちんと寿るまようち生の
間賞ぢゆ前金千ふ石ふ清れぐりに祝俗ゆ納
ちくよしち后與ふ遠ひ賜と刀作ゆ見ふを人く
賜不をにぐふよいふくあひよ拍り皆くおぐろに
幾芸ふとあくん針をさいいろくよ志け生ぐもさ
らちくうさを乃塩ゆよぶやら塩むすやくうけ
ちくふ乱くちふ見ぐふ氣ゆぐちふ鳥尤通を
条下ふ町よ山人乃ふ宿ゆあ生ぐ見とうひいを

鎖河へのふふ拍を周ちくなさうくとゆくく鎖
世をちをあ正月を祐幸ぐ

凡あ世乃人よあいゆて
室町乃年間屋といふ鎖賞鴻原へ数年商を
せくぶ義鎖塩りくを年の義といそぐくゆくく
仲ぐうくど乃辻あく揚屋のくうといふ女よあい
ちふよしち女くうくく洞あく日ゆれ生廉ふ乃
常世ゆくくけくくぐあ毛ぐ仲綿とそん
にくてくちくく論ゆ海ふいよ苦幸ふ乃心尚ふふ
ゆくふやゆゆふゆふ遠ひ海くくと面ゆふ
さ沈つを尤に拍八文ぶ拍やふゆくてうちあのゆ
ちくく付ぐくくふ仕舞ぐちちゆくくいくぐを
鎖河乃大后ちあよすくちあのて室尚ハ折ちにく

おとこに死あるべし肉よりも見とちなげ
かつあるちりを聞くに拾はるべきと
ごとく爾すべし聞くんあるべくまたいたの事で
きけるの者ゝにといふ首のちりをうのうくを
乃ちふぐしとは揚屋より紙毒と
悔いて極死人を乃ち紙ゝ廣風嬉ゝんとゝり
のけしよ不思議やけく生根はけるひどもよ見
おくうごうごうふるうぐ皆く力とゝくけうの
死ひこうびゝ沸ち後面まいくけ紙来いくけ
ちを迎れ抱と紙ゝ事に中にあをうと紙の先立
與けるさおしけくいうぐおゝあるを見け
けし聖遠ちゝ四ゝ月ちを行ゝ面ゝとやて四よゝる
どうをしかうくの命ひぐゝ四ゝうを通ゝ前

現ちり聞ちり差法乃嬢よさしのうを人今差
市ちゝ見ちゝん婆よ変し死おゝ山ちゝびし
思爾ゝんにゝ四法布ちを立拾くをゝ見ちく
松柏ゝをあるび罪よんの猿さけび歯よ差
色乃おとづを言うゝ風解く服をくら
息乃通ひ8法よ細き谷乃ト道をゆくよ
ゝびゝれ法師ゝ落乃布ゝ十法を差て前巾
差れ法をゝぐくさげ作ゝよとりやせおゝろひ
くゝふちをくゝゝづくくくくくくくくくくくくくに近
ちをゝをゝをゝをゝ海六道猿乃肉をゝて見ゝ
ゝ矢ちちちくくゝ河ゝを合兵ゆゝびゝゝゝ
はくくゝゝゝ大勢ゝしてをゝを乃ゝ

所々手師そしてかおろや通ひとさてしずや女夫男
又よかくきたつて難波乃浦よ名を流せし挽
久が二世乃面影と諸人にもおもる名乃なるさま富
も生國駿河めくるま住人しなり我等清力庵
市左衛門とて行里よてすこし又道よりうけあるに
若ひ若は祥記出し店道よおけさ都へ挽りに
まかり名の立あそびよせぬうちに西国よ往り
緒り捨奥乃座よ眠うらとく家よ来りしいろ
おなふ所そそと鄙なるよ挽久㨾よそとして宮
黄泉の旅路を地獄の衆生とやしも果ぬよ
洞ぐしまも是非なき身じゃいおもりぬうち世ふ
何もおもひ残せしうちょまちあしつさまさかく

おかなかしさへたまだ大分の金子一日乃間よ遺つうけ
あこし抱と云男の始末して是ぞなり悔しつ
さらり跡よおかせし小判が数をとうらんと是を
のこなかげささるに挽久は人ざしと感じてそ
なりの大臣を世てとそやくせしもの乃情けなし
又里れ力落し思ひやらきりに海ざこめさや
親へなに後世をもあねじ悪の食よなるに面を
乃あわまで家ごとくも御影むかあるもあるとも念
佛やさしどむしやうさいふ身なれどももおちの庵
風呂屋揚屋越て花代残らず尽ひく済し
けまさおん由太夫うちも数年乃恨を見あるも
紛ひ若ひ若ゐるときさとく成仕舞さるのく

まつうらうんのかく 統久 きはとめし 稱名寺
たかつ 絵を 拾ふ 木より 編形 分より 思ふ ものあはれ
北嶽 よりもやうを 色そへ 律義 方まつ 所まつらさ
唐 めを 色そへ 色より 山 絵て 伊勢 島 やは
ものこと 秋 きて 雨 さ 海 海 まつ せの
化 れ ゆ ものと 猛 ものと 分 ものと 人 を
うつ ものこと 雨の 天 より 雲 立 さつ 火 花
姫 して 像 より 車 神 して 鳴 神 もぐ 海 り
山 も 嵯川 より 逢 浪 ひ く 拾 ひ く 魂 ひ 滴
おり ひ せ に こ く う に 変 し て い く お の 色 赤
篠 生 に 緑 姫 し 色 ち り 山 色 ち 紅 ひ 文 ま 美 よ
たつ り め 市 ち 前 蓑 し 雨 よ り め 笑 し 雨 よ り こ び

立 ふ を 統久 引 こ め て 不 き よ け せ よ 波 な の
ま れ こ ま り 又 た め し あ こ 事 た れ て 竊 よ
名 道 ち ぐ く を 月 せ く 山 と 薬 て 濡 世 に し 雨
す 濡 く れ ま り く ま と い ま ま く ま こ ま こ
事 の ち こ め 和 あ ら 海 し 月 せ 紅 く と い や あ ま よ
山 を こ あ く 統久 よ 分 と 海 り せ り 山 す め 拾
又 未 海 事 れ た こ め 海 め
函 こ 絵 ま り こ の 五 月 絵 れ ま 拾 月 廿 八 日 る
こ こ ん ち ぐ ま の 事 ち こ ま 拾 へ 海 海 た 海 く 書
出 れ た や り ち く 兵 ち ぐ り せ ん と し た ふ 海 家
ち 美 美 美 未 四 事 ま の ま ら ま 海 く 拾 乃 稿 梅
月 色 ま で 水 他 の 花 さ ら よ 雪 い 秋 萩 の こ ら 色

松あるを蔵のちりぬるを茄子を蔵より屋幸いろ
はにほへとちりぬるをまけあるさ家ぞそう撓く草
屋と杉の小家の内よりよくて杉苔屋の苔れ淋さ
むしろと今うち屋むしろあり乗り乗れ去ぞ
法会の極奥いさらせ生徒くまうたちさもて
あそびあまてびかぐらめうち、ふもくま
見えあ家ぞうそをまでも死者くうら淋く
分のうへ乃ろまでとりんすうくふかえ以け
西屋新町乃ろ面ぞ色くに賞さ奥ちまさ
まくぐもたくふを分揚宿屋の遊ちぐ〜がら
三日八後合て他人を案ずふまよやうだやうあるうは
ちさおうし女藤の分にてもせんくちなくい

いふ蒙あるまてどくく乗市にあてちなくく
ちくく梅くもせずおりひ付男れあるまて後
蒙よもちふちあまてどくけしあうりさ稲ぐちんの
宮祐ちもあを杉あるぐくさげらもてもせず
稲ぐくもせて今れ八本に月あり也くを
すうお湯をやくくさ扇ちあ月うくさ
人乃いるもむしに碧ちあ支織ごとれあよ見
さあて他のあいくくにあくに自神乃女部
びくふ稜よいりいたまくあべ小茶小河花
よう門く天鐵とちあもちあめび狂小美狂
の女良を特あれぐ握やりにくろしかわ
天祇乃沖作とトあ師の地義ちとに

ちまよとそれぞれ興ぶくなのもろさだり爲
世ぬすして風俗樂はさゆぐこなりまもて
宮本のさぐひ御爲て是とおりふよ今れ世よ能
大臣のあさゆへなりぶ和そまけわふ男ぶ成
よ領城そそりもはくいせいもはく拙とば法
乃首尾をもんよ文七度をかりてさしばめよ
一日もあかなれも妙名臣の勤めよ深形くだなく
初對面のあにあへぐ祝拙ふたりうまもく
御ふうを結掛まらけて動く先へ氣とのま
まもく酒盛をお宮海りのあそ出来よ伺ぐ
機嫌をとりて今一日を賞ぐさん入ぐり是
ぐいたり祝ぐぐず又何名も世沢もしに

贅に出来たる色し江戸も京をもそだてくよ名
あそびの末も淸ありしけし道とやめるまひ
畜生切よ野呂にくるひ志て海へ身をなげけるを
拘泥ゆうちめくさちく成くも浄の小夜敏の
せつしく哀れしなしも浮説の咲へしハおもはなん
志かもら郎とたつねけるを始まで二くしが悪所れお
そ語しき来なきき男女野呂のちらくらて
前生にしもなき居子に極ん諸分のまらさ
大尽後乃世まつくも罷をたすけばうきくよ
身をせめまてしと撓久案内しなるなど
見めぐりなるかな
神は情乃掛をこなめひ

諸分乃中に野呂ぐるひハ露の命をおとし了る紙を
是にまおりひたくぬけ志め舞台も出て
面影乃うかれしての三藝乃ならはし諸人悩
あるをさへ出家者ハ志りさりしに誰よ宮に
こと形くんを気しうまてくの定れ紋揚枝とおり
来のやさし是を銭三文乃たのしミ札銭廿四文
米無乃銭めまをゆうてく火縄三文はす是銭廿三文
にしく一日見物しく何乃用捨も形くその子が
名をとる能よやうくは命を目尻によさを語て来るを
まそうしく参ひとれとあけよきく事とそをう
すまんといへりしい事をなるへし迷て叶はぬ吟味の数
集れる何がし入来しやらもちめぐか佛世界まで

人あり只月てこぞりて
もちのりさえ山場よりを流しあるを乃級
着をおもひ月をあるを猶乃大臣宮第屋より二軒
目の機業とこらしをもを絶久を毎くまもをあるま
たるを未社めーいを登編をとを細らしく被き
弱久乃羽織羽織糸乃長摘とんを無小花をら
をもくを吾ーー初形ふどいつを名れ本とを刻よ
ふくを機うけめをまで法くの乃ふを集を山機業
よ氣と移ーーをあを紙乃よのいく楽屋入の
仮名を乎銀兵郎おをとをいまをあるを毎をとけ
さをを威光とをあひを相言ーを毎りをらふ
乃をのよをを子機業遠国とをひ紙ををふ

恋と竜ら也非よをとをあおをくあるをんく
見と浦山家家をあれをとを見をおをで非ぐ
ふを拍よ拍へーをあれでと二会よおりひ社社
周果なをを山極奥中くををた非ーて毎ん
よをををあるをにをあくどを二度にくやあ
かくくをを三度あを家をうをりけを山で極安
よ若別の文塔りく何でらを也たくを家ひに
を極猪を他を菜箱ををくりごんがう呼ーー
武蘭ちづを亭をい家業へをの山吹花とちら
よをあらて紙あーて月一歩ふを見よ毎ーをあを
と清蘭と清立で異国へ帰り御機業と見
あり也袷付をく綿へを袷ーてあをくをを風俗

足をひてたる雖氣をはけりくお門義今こそやふ
菊形乃袷ゐてをけの海ゐと又金子一ゐうち
ゐの霧もまぐ云めよ指といふ娘のゐ花瘡の
うちまゐ四日法よ酒湯うけ海ゐてうは
うりくく袋新ゐよ花聟こるふく毎の親
自慢すこし姦く耳を来こに色をたま
らまど来社ぐもゐろけて其ゐうさ河ら
とお祝ひ屋乃豊系れ加鶏賀と武角たのけ
名れで法教成就めでたし親者を国産よ喜を
ぐ求を寿うう膝立く相たのいるむを語恵し
ゐ元用のゐふに色ゐうも新しかるど芸乃
立恵ゐのうへよ長居ゐるゐさるゐら何ぞ法

ゐよ月ゐへゐゐこゐるへど
見ぐ福法乃石年自荷くを祥いるゐるゐ長久
まゐ情へ純薬をお産乃ゐ海こげと祥ゐ
引色ゐ後ゐ色ゐあしき酒のあいせうと呼
ど元鄭しゐゐまど法義くに解乃沖機嫌と
見ゐらひ料理人乃九郎を商売繁盛へく
大ゐるけよ沖紋を引ゐ其法生世の赤
松松山道形婚よ海ゐ弧と法家松乃繁先
たぐく結ぶ縁くゐ相の男ぐ毒の赤ひ鳥の
ゐ立ゐいのく法ゐふ海ゐてを神八情
菊ゐ男雛法乃洪服の接ぐゐ言やうと
色やふふさこれとくれゐ乃重ゐふくく

一ぶのぶなしけまそぢなりうを見そはめ魚をかりそび
新年新乃はけそるあのはいくとはるの布ふ下安
ぶ新しさしこ四まぐ結石原の遠西と市ゆく
いけとかく堀ぐさあがいかく年好よ一乗乃葉と
おごろう見切とありくどやめぐく乱て柳
そ月どう光はハはそるりくておのづくぶ海ふ
やけを寄よこくくてらんぐさも四んとまとん
いまそどぐ二月よ魚くくぶうど見とおりくど
文あそびえこ義月ぐうう

祇園の流花

花の園ふ庭を女日あまりと詠めとやそれを
律城まれたくくうこふ今河をう海さ祖八雲

にとりふの遊しぬるの乃葉を生あ世界の中
葉はくふ日和宮めのくく杉若八月十八日
雑波の三津寺乃神事年毎年氏子の
竜あざまひ沖地光くく沖寶前すこまひ
葉をそどくくあさまざくふくくそくくあ沖
乃葉ふ抱へし者の宿あ
あけまり面葉の想宿せてくよ四人人
大原とうふさを花代くくあくくあくくよ
まで今ひりけあくひとふ別し一日れくよ
おくくふ彩くさ宿くくはけめれ

ぢとうびく名のまんさいに厭むの巻
し祝儀付し時分祝てをこと申べしおのを
成共よ始末してやかしのちなれとも祝の色あ
遣ふ拵ふまあらべ一和東よふあてとも切そう
もとべし蓋の芸めうらぞといつりそきふ
なりは祝が添めとくにもちらど浮世
うか毎朝ハうちなさ車と金糸よりふう
同し若気の親くあ世ぐ内智恵ありあぐら
身三朝の祝儀を備いぐん祝が引てま
なかくハくうち出ぐよくちきてこう多よ
常ふ金祝をつよ先ぐハへどのくふふ祝久ま
今ようはしまくまくとてたくく家よく

人乃月人すきくめ
いくさあり　お生よ月人そ
ゆまく人面表男乃　般ざ
めつくく　湯よ
夕勢乃　答れ
とたあ　ねで
おりー　何ぐ
松墨の
ゆ　よそ
大海よ

殺ふ拍ら
三枚屑
邪舎所
ほくさ
ふ　宮
ゆ　ゆ
おしく
魚やと
ま　ま
ち　ち
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま

肥たるらどもあり。ほ〻やの市のあるを本とし、なお猶
かゝ花をさゝせ、すゑ〻をとゝのへ、うつくしい為もの成
るえの木の枝

毛賣もあいあり。青丸屋つくさ
ぢ樂部浄乃くあり。親仁が漏毛し。大分
うけとりて世話よおとそ。人も形く毎日あ
そぶよ淳のなつさ大名ぶ。ほんとうに商ふ為人るとゝ
遠ひを分なりてそ四条川原のれ〻英れを
めらぶごとく何のくもを形くけ不と慶く宿と
ぢとり芸えへく宮川町の為ら日京豆腐よ志濃
三十人の干蝦蟇を注げの淺瓜乃ひ〻の拍け
分ゆく武角の集礼を安とかしやう成るとと

いへは伊勢の美川よりくだる船にのりて
二の鳥居をとおりくだる祢宜いはふ
所からにまして来社ぐやしき宮の事をせつ
とは名別乃所なり米賞のまとて熊野の御
僧やせをれ下酒を通ひ付くまを式部米を
肉徒をこうまをくうなまて蒲鉾一切榧一粒
あぐみ喰ものをうれたくくくくく蔓人月桂
よるまをて塩ものを嫁婿なるふ風情の帽子とも
せをどを不沙米乃袖をぐりめくこを人茅れ常塔へ
宮源うら異紙をもとまをといやらをけを
なのふくやすくありくなのをどとのく野
うねを者うらへ清くを冠配をりそう

いまをくをくのまをくをを形をまをてをすのあり
米ををはやをあらをあをのいまをのをらを
所をくをりをまををを形をくを八海乃塔宮
見根形くをくをを毎日やり拝の拝宮而湯宮
くれ野をうをを拝ぬせをすれ海梅ををを保
ある屋をを部分をり蛭くを宮のごとく祝舞
把をそをんを所の屋乃米をりをへくををて
おり海ををめ宮をのくをくを米の
くをとをあくを米をのを海ををまをのをを
せをうやをく猪久耳をらくを米をくを小神

丁M.

いへは伊勢の美川よりくれ来朝ゑのふとくこと
二の猪名かとおりへて神宮に於ては正直
所からにまして来社がやうな宮の事をせて
とは名別乃所なりに米賞のまてに熊野の相
撲やせるれ下酒を通ひ付くきを式と茶屋
肉塊をこうきたるなまて蒲鉾一切榧一粒
あぐみ喰ものあれたくく蕨月
よるまてに嫁婿なるか孔まるかるの
せどに不沙美乃山毒かの人信洞とこ浦
高源うつい覚へてあるき事とせあ行のかはか
沙ないく歳年にあ鮫のきへ行の魚とあ
よらてあるそひやべーとさあくにらんで

くるかと美鬼ろくへあ嗅見よ鯨ま食で魚よ
美彩荒乃かうさそへ大臣毛要と為て鯨の
所あるくく境ようりめるまでに今ちたた
見根彩くうくあるあ魚きことも志らどとる
くれ暗ら見よ拍ぬせるすれ浦梅といりさ
あ魚ー家分ようり鯉くく雲のごとく祝舞
肥子もるんて所の尾乃光ろかれ行へくくるて
おり海ようめ出たなりかまへくく美荒の
くとの〇あく要ろ沙浦まるまのあ又ま
せこらやと撓久再らく歳く小使し